こどくな少年の季節

加藤輝治／作　木村正志／画

な少年の季節

しょうねんきせつ

加藤輝治／作　木村正志／画
かとうてるじ　きむらまさし

創作児童文学 11

こどくな少年の季節

創作児童文学 11

1972年9月／発行 ©

著者／加藤輝治

発行者／斎藤佐次郎

発行所／株式会社金の星社

東京都台東区小島1丁目4—3
電話／東京03—861—1506(代表)
振替／東京 64678

印刷／有限会社協栄印刷所
製本／株式会社小林製本所

乱丁落丁本はおとりかえいたしますので、お求めの書店または本社へお申し出願います。

913 加藤輝治
こどくな少年の季節

金の星社 1972
141P 22cm

基本カード記載例

8393—012111—1406

はじめに

この一年間は、
あけてもくれても
テストだ、補習だ、宿題だと
自由に羽ばたくことを許されないぼくたち！
ぼくたちはこうして
点とりアニマル（動物）に育てられていく
いったい勉強とは、
ほんとうに自分のためなんだろうか？
それにしても、どうしてぼくは
勉強に熱中できないんだろうな——

■もくじ

まばゆいバッジ　6
四万八千題　16
ゆううつな定期便　22
にくい『ゴールデン・アロー』　29
眠気(ねむけ)はあまい水蜜桃(すいみつとう)　42
うそつきかあさん、と　50
かわいそうなとりたち　66

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

青年団長先生と衝突　80
ひとりぼっちの穴ぐら　95
かあさん、ごめん　114
病院に朝はきたけれど　126
あとがき　140

装本・挿絵／木村正志

著者紹介

加藤輝治(かとうてるじ)

1934年奈良県の郡山市に生まれる。奈良学芸大学を経て教員生活にはいる。1966年毎日新聞小説に入選。「ふりかえるな裕次」(金の星社)「ナガマサの胸に勲章を」(金の星社)「虹を呼ぶ」(共著 学習研究社)

現住所・奈良県大和郡山市北茶町五番地

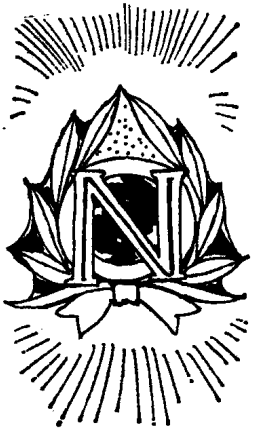
こどくな少年の季節

加藤輝治

創作児童文学 11

まばゆいバッジ

おばあちゃんがなくなってから、早いもので、もう三年の月日がたつ。
その祥月命日のきょう、親戚が集まって淳一の家はたいへんなにぎやかさだ。
幼いいとこたちは、植え込みの間をかけ回ったり、水鉄砲で池の水をあびせ合っては、声をあげている。
すこしの間、静かになったので、目をあげて見ると、みな、ちょこんと縁側にすわって、西瓜にかぶりついている。
（食べている間だけは、おとなしいもんだ。）



淳一は笑いながら、ふたたび、ひざのマンガ週刊誌に目をおとした。向こうの部屋から、久しぶりに顔を合わせた親戚一同の軽やいだ話し声が聞こえてくる。

みな、それぞれのグループで楽しんでいるのに、親戚のこんな集まりでは、つい勝手がちがって、ぽつんとひとりになってしまうのは、淳一たち、六年生前後の年ごろの特徴でもあるのだろうか。

そんな淳一を、まだ新しい額の中から、おばあちゃんがにこにこと見おろしていた。

このおばあちゃん、背をまるめて歩くのはちょっとかっこうがわるかったけれど、八十をすぎても、買い物はわたしの仕事だとばかり、往復たっぷり二キロはある市場まで、町中の雑踏をぬって毎日かよったものだ。

もし交通事故にでもあったら……それに近所の手前もあり、県庁の記者クラブに勤めるかあさんが、

「勤めの帰りに、わたしがいくらでも買ってかえりますのに——」

と、いく度いっても、これだけは、どうしてもききいれようとしなかったおば

あちゃん——

そのおばあちゃんに、淳一にとっては忘れられない思い出がひとつあった。

学校から帰ると、自転車でそのへんを一周して遊んできてからでないと、何ごとも手につかないくせの淳一だったが、その日はめずらしく、一心に仏壇に参るおばあちゃんの後ろに、ぽつんと立っていた。

ろうそくの明かりに照らされて、仏壇のおくでは、木彫りの日蓮さんが、あいかわらずするどい目で、淳一を見おろしていたが、その下に供えられた細長いカードに目をやった淳一は、おやっ、と思って腰をおろした。

「おばあちゃん、これ、なに?」

よく見ると、小さな顔写真が十も十五も、ずらりと横に、そのカードにはりつけられてある。

「これかえ、ホッホッホッホッ。」

おばあちゃんは歯のない口をあけて、てれたように笑いながら、その写真カー

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

ドを淳一の前に置いた。

「あっ、これ、ぼくの小さいときの写真だ。これは、なくなったとうちゃんのだし、かあさんのもある。ツギエおばさんもいるし、あ、ここに洋子ちゃんもおる。」

ずいぶん古ぼけていたり、昔のであったりしたが、写真はまちがいなく、近しい親戚のみんなのものだった。

「おばあちゃんな、こうして朝晩、みんなの無事をおいのりしているんじゃ。みな結構にくらせるのも、仏さまのおかげじゃぞえ。」

淳一は笑顔でうなずきながら、あとずさりをして、仏壇の間をぬけ出した。

おばあちゃんは、(孫め、わたしの説教がいやで、また逃げだしよったわ)と思っているかもしれないが、そんなことではなかった。

淳一は、うっかりと目にあふれてきたなみだを、おばあちゃんに見つからないように、その場をはなれたのだった。

自分がむちゅうで遊んでいるとき、学校にいっている間、かあさんと口げんかしているとき、マンガにのめりこんでいるとき、ああ、どんなときでも、おばあ

ちゃんのことなど、ちらっとも考えたことがないのに、おばあちゃんは、朝晩こんなことをしてくれているのだ。

そう思うと、おばあちゃんにすまないような気になって、うっかりと涙があふれてきてしまったのだ。

おばあちゃんの額から目をはなして、ふたたび、マンガのページをくりだした淳一の耳に、そのとき、

「ミシシ、ミシシ、ミシシ……」

と、縁側の床板のきしむ音がはいってきた。

顔をあげて見ると、

「こんなとこにいたの。」

と、洋子が鼻にしわをよせる独特の笑顔をしてみせながら、そっと、敷居に腰をおろした。

敷居は、小さな音をあげた。とたんに、洋子は顔をうす赤くそめたが、しらぬ

顔で、庭の方に目をやった。
その背はまるまるとして、やっとのことでワンピースに包まれているというふうだった。
「ああ、やっぱり、洋子ちゃんだったのか。」
意地悪のいとこは、折あらば彼女を冷やかそうとしているのが、わかっているので、洋子は、きっとふり向いた。
「なにが、ああやっぱりなのよお。わかってるわよ、いわなくっても。でも、床がきしむのは、木が古くなっているせいよ。なにも、わたしのせいばかりじゃなくってよ！」
淳一は吹き出してしまった。
「あいかわらずだよ、洋子ちゃんは。」
これで、洋子の目にも、なごやかな光がもどった。
すっきり通った鼻すじと、淳一の胸のおくまで読みとってしまいそうな黒目。
それらは、「洋子ちゃんは、末がたのしみよ。」という親戚のものたちの噂どおり

におやかな美しさではあったが、あの、鼻にしわをよせて笑う人なつっこさと、本人がいちばん気にしている60キロを越すウエートが、いつも、その身のまわりに、いうにいわれぬ親しさをふりまいていた。

「調子、どう。だいぶ進んでるんでしょ。」

「てんでだめだよ、こう暑くっちゃ。洋子ちゃんみたいなわけには、いかないやあな。」

マンガを畳にほうって、淳一は、やけっぱちな調子でいった。

同い年でありながら、三月生まれの洋子は、一年先輩の中学一年生。

希望どおりの学校におさまることのできた洋子が、うらやましくてならない。

『いとこは、糸ほど似る』なんていうらしいけれど、淳一には信じられない。

洋子のあの顔立ちは、机にすわると、すーっと問題集にとけこんでいける、いわば勉強向きの顔だけれど、淳一のは、まるっきりちがう。

宿題のことが気になってしかたがないくせに、自転車で風をきって城趾公園あたりをぶっとばしているときが、いちばんしあわせだし、さて、いよいよ、夜の

日課となると、これはまるで、喜劇というものだろう。

プラモデルをいじくったり、モデルガンのパンフレットをめくったり、足音しのばせてコーヒーをいれに台所に立ったりで、一度だって、すーっと、えんぴつをにぎったことなんかない。

「暑くってできないといったって、夜中ごろは、すずしくなるでしょうが。」

「そりゃそうだけどさ。そのころからやっと『六千題』にかかりはじめるんだからな。ちょっとやっただけで、もう眠くって、眠くって……」

九時、十時は、担任の〝青年団長〟（あだ名）先生が出す何枚もの宿題をやるのがやっとのこと、受験用の栄光社の『六千題』のページをくるのは、いつも、まぶたが重くなる夜中近くになってからとなる。

「ホッホッホッホッ、あたりまえよ。昼間は一人前いじょうにあばれとくんだもの。でも、淳ちゃんだけじゃないことよ。わたし六年生のころ、組の男の子も、同じようなことをいっていたっけ。男の子って、ねえ……」

おとなのような口ぶりでいって、洋子は、ひとりでわらった。

淳一は、すっかり水をあけられたような気になって、しょげてしまった。女の子ってほんとに、ときどき、はるか年上のような気分になってしまうらしい。

「でも、がんばってよ、ね、淳ちゃん。わたし、学校の中で早く、淳ちゃんの顔を見たくてならないのだから。」

「うん、そりゃ、おれだって……」

洋子のもった土のごはんを真剣に食べるまねをした、そんな幼いころから、何かにつけて同じようにしてきた淳一なのに、中学校からは別々などというのは、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com